援助技能の習得に向けて学生の考察をどのように促すか？
－学生のレポート内容に関する分析を通して－

○島根大学　　黒田　文（2095）

キーワード：相談援助演習，グループワーク，テキストマイニング

１．研 究 目 的

本研究の目的は、相談援助演習（以下、演習と記す）を担当する教員が、援助技能の習得を目指して学生に考察を課すレポートの課題設定の違いにより、その考察の内容がどのように異なってくるかを検討することである。

本研究者は、昨年の本大会にて、演習を通じて学生が自らの技能向上に役立ったと考える内容が何であるかを探索した結果について発表した。その探索では、学生が自分の技能を確認できるようスキルチェックリストを活用したが、彼らの「気づき」として言及された考察の多くはチェックリストの一部と重複しているという発見があった。学生の立場からしてみれば、演習で教員が取り上げた指標を規範として取り上げることは、いたって自然な行為だろう。しかし、学生がチェックリストを基準に考える一方で、技能に関する気づきの内容や言及がリストの内容に限定されてしまうのであれば、それは指導者として、学生の学びの拡がりを限定していることにならないのかという危惧も発生する。そこで、本研究は、あえて指標を持ち出さずにレポート課題を与えて、学生の考察を促した場合、その考察がどのような内容になるかという点について昨年度と同様の手続きによって解析を行い、その解析結果を比較・検討したい。

２．研究の視点および方法

本研究では、社会福祉士養成校の A 大学で、2012 年度と 2013 年度に開講した演習の受講生全員に対し、演習のどのようなことが自分の技能習得に影響を与えたかについて考察させた。受講生全員の考察文をテキスト型データとして分析の対象とし、テキストマイニングによる解析を実行した。受講生に対しては、各年度（2012 年度と 2013 年度）で同じ演習内容を同じ時系列で提供しているが、技能に関する考察の指示内容を敢えて変更している（具体的な演習内容と指示内容については発表当日に示す）。各年度ごとのデータに対し、係り受け頻度[1]に関する解析や対応分析等を行い、その結果を比較することで、教員の指示設定と学生の考察内容の関連について検討した。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、調査の実施と解析を行っている。調査対象者の匿名性・プライバシーを保持することに加え、回答者からはデータ解析の結果を研究成果

[1] 文章を最小単位に分かち書きした後、最小単位の語と語との係り受け頻度を計算し、最適な係り受けを選択する。

として公表することについて承諾を得た。データについては必要に応じて開示できるよう管理・保存している。

４．研 究 結 果

下図 1, 2 は対応分析の結果について図示したものである。この結果からは、各年度の受講生が記述する用語に共通点があるものの、用語の距離や配置には相違のあることが理解できる。

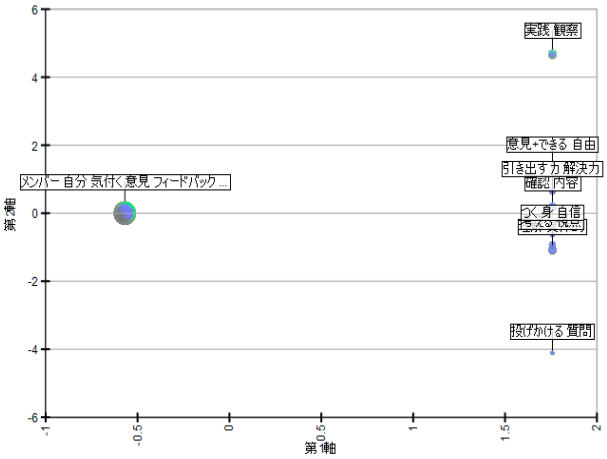

図 1　2012 年度受講生データ

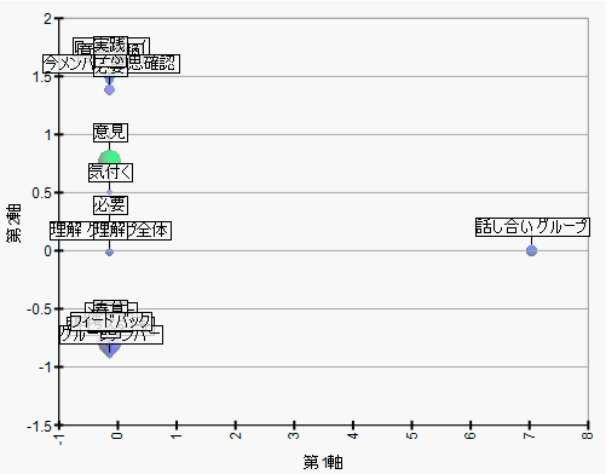

図 2　2013 年度受講生データ

5. 考 察

チェックリストを参照しながら技能向上に関する考察を教員側から促した 2012 年度受講生の場合、その考察内容は技能についてより具体的に記述する傾向があったのに対し、チェックリストの参照を要求しなかった 2013 年度受講生の場合（ただし、演習中には自己アセスメントとしてチェックリストの記入を 2 回要求している）は、チェックリストよりも自らが経験した印象的なプログラムに言及し、具体的な技能よりもそのプログラムが自分の技能向上に影響を与えたという大枠について記述するパターンがみられた。他方、係り受け解析の結果では、チェックリストを参照しながら考察することを促した 2012 年度受講生のほうが考察で使用する用語のバリエーションが多く、チェックリストによって学生の考察パターンが封じられているわけではないと考えられる。

【引用・参考文献の抜粋】

Goldstein, H. (2001) Experiential learning. Council on Social Work Education, Inc.

Yelloly, M. and Henkel, M. eds. (1995) Learning and teaching in social work. Jessica Kingsley Publishers.

付記：本研究は、国立大学法人島根大学法文学部学部長裁量経費（2013 年度）により実施された研究成果の一部です。